



Title	C. T. モハンティの個人史 : 「第三世界」フェミニズムからグローバル資本主義批判へ
Author(s)	近藤, 凜太郎
Citation	大阪大学教育学年報. 2024, 29, p. 39-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94613
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究ノート〉

C. T. モハンティの個人史 ―「第三世界」フェミニズムからグローバル資本主義批判へ―

近 藤 凜太郎

要旨

本稿は、インド出身のアメリカ合州国在住フェミニスト、チャンドラ・タルパデー・モハンティの「第三世界」フェミニズムおよびグローバル資本主義批判の理論的骨格を明らかにするための予備作業として、彼女の個人史を整理するものである。モハンティの理論は、1986年の論文「西欧のまなざしの下で」をきっかけに世界中に知られており、西欧白人フェミニズムによる「第三世界」女性の植民地主義的表象を批判した代表的な論者として歴史に名を刻んでいる。

だが、こうした理論的思考の条件をなす個人史的背景については十分に論じられてこなかった。また、貧困労働者支援団体との連携、合州国の帝国主義的世界戦略への抗議、ウィメン・オブ・カラー・フェミニストのライフストーリーを記録する映像アーカイブの制作など、アクチュアルな政治課題にコミットしてきたことも、あまり知られていない。本稿では、86年論文に象徴される「第三世界」フェミニズムの理論がいかなる個人的体験や制度的文脈から生まれたのか、またその理論が資本主義の最新局面に応じていかなる政治実践へと展開したのかを辿ることで、モハンティ理論の今日的意義を理解するための補助線を提供したい。

はじめに

本研究ノートの目的は、インド出身のアメリカ合州国在住フェミニスト、チャンドラ・タルパデー・モハンティ (Chandra Talpade Mohanty) の「第三世界」フェミニズムおよびグローバル資本主義批判の理論的骨格を明らかにするための予備作業として、彼女の個人史を整理することにある。

モハンティの理論的立場は、1986年に刊行された論文「西欧のまなざしの下で：フェミニスト研究と植民地主義言説 Under Western Eyes: Feminist Scholarship and Colonial Discourses」とともに世界中で知られており、西欧白人フェミニズムによる「第三世界」女性の植民地主義的表象を批判した代表的な論者としてフェミニズムの歴史に名を刻んでいる。その議論は日本でも90年代後半から精力的に紹介され (岡 1998, 堀田 2001, 米山 2003)、「第三世界」フェミニズムの基礎を築いた理論家と認識されている。一方、モハンティの理論はこの論文以降も継続的に深化を遂げている。1997年の長大な論文では、多国籍資本による貧困女性労働者の搾取を分析し、グローバル資本主義に抗する連帯の可能性を模索している (Mohanty [1997]2003=2012)。2000年代以降になると、グローバル資本主義と結託した軍事主義的暴力の激化をふまえて、反資本主義トランスナショナル・フェミニズム (anti-capitalist transnational feminism) という言葉で自身の立場を明確化するようになる (Mohanty [2003]2003=2012)。こうした力点の変遷がフェミニスト研究に与える意義については、本稿とは別に、理論内在的に明らかにしていく必要があるが、その作業の前提として、

理論的思考の条件をなす個人史的背景についても具体的に深めておく余地がある。また、モハンティは、理論形成のみならずアクチュアルな政治課題にも絶えずコミットしており、貧困労働者支援団体との連携、合州国の帝国主義的世界戦略への抗議行動、ウィメン・オブ・カラー⁽¹⁾・フェミニストのライフストーリーを記録する映像アーカイブの制作など、多方面に及ぶユニークな活動を展開しているが、これらがまとまったかたちで紹介されたことはない。

日本のフェミニズムの状況に目を転じると、「第三世界」フェミニズムはいまだゲットー化される傾向があると嶺崎寛子（2018）が評する通り、反レイシズムや反植民地主義の視点が一部の「マイノリティ女性」のみに関連するかのよう特殊な下位領域に押し込められている現状は否定できない。しかし他方で、松井やより・富山妙子らによる「アジアの女たちの会」の活動や、塩沢美代子によるアジアの女性労働者への聞きとりなど、日帝時代から継続する日本のアジア支配を問う女性運動の潮流は連綿と続いてきた（伊藤 2011, 水溜 2012）。それらの潮流は、沖縄の軍事主義的性暴力や在日朝鮮人女性・移住女性へのヘイトスピーチ、さらには日本軍「慰安婦」／性奴隷制／戦時性暴力被害者へのバッシングなど、ジェンダー化された植民地主義の暴力に対する抗議運動へと着実に引き継がれている。モハンティが80年代から一貫して模索してきたのは、こうした反レイシズム・反植民地主義のフェミニズムの系譜を、その個別具体的な歴史の文脈を損なうことなく、世界規模の創発的ネットワークへと連繋させていく連帯（solidarity）の理論であった。「第三世界」フェミニズムから反資本主義トランスナショナル・フェミニズムへ至るモハンティの思考は、人種・国籍・階級・セクシュアリティ等による分断状況から目を逸らさず、アジアないし「第三世界」との広い連帯を生成していくうえで重要な理論的基礎となる可能性を有している。

以下では、いくつかの回顧的なエッセイやインタビュー記事、講演記録映像に残されたモハンティ本人の文章や発言に依拠しながら、フェミニスト研究者／アクティヴィストとしてのモハンティの足跡を時系列的に整理する。モハンティの仕事は、「西欧のまなざしの下で」（以下、86年論文と表記）という1本の画期的な論文に代表させるかたちで、つまりはひとつの「点」として記憶されがちである。本研究は、それを彼女のトランスナショナルな足跡に位置づけることで「線」として把握し、さらには彼女を一員とする合州国ウィメン・オブ・カラーの共同性を浮かび上がらせることで「面」を描き出していく作業ともいえる。こうした作業を通じて、86年論文に象徴される「第三世界」フェミニズムの理論がいかなる個人的体験や制度的文脈から生まれたのか、またその理論が資本主義の最新局面に応じていかなる政治実践へと展開したのかを辿り、モハンティ理論の今日的意義を理解するための補助線を提供したい。

1. 独立後インドでの思想形成と合州国への留学：1970年代～80年代初頭

チャンドラ・タルバデー・モハンティは、1955年、インドの都市ムンバイの中流家庭に生まれた。1974年にデリー大学を卒業後、76年には同大学で英語学（English）の修士号を取得する。ナイジェリアの首都ラゴスで高校教員をつとめたのち、留学のため合州国へ渡り、80年にイリノイ大学英語学科にて英語教授法（Teaching of English）の修士号を取得、87年に同大学アーバナ・シャンペーン校にて教育学の博士号を取得している。博士課程在籍時の専門は、意外にもフェミニズム理論ではなく幼児教育であった。学位論文のタイトルは「ボンベイの都市中流階級における2つの就学前学校にみる性役割の隠れたカリキュラム」というもので、インドの就学前教育における性役割の社会化過程を参与観察の手法で描き出す手堅い実証研究だった。在学中には短い書評を除いて目立った業績はない。つまり、モハンティにとって86年論文は、フェミニズム理論をテーマとした初めての本格的な学術論文ということになる。現在は、シラキウス大学女性

学・ジェンダー研究学科 (Department of Women's and Gender Studies) 教授であり、過去には同学科の学科長を2度務めている (2008~11年と2015~17年)。

生まれ育った家庭は当時のインドでは比較的豊かな階層に属する都市中流家庭だった。だが、大学院に進学して博士号を取得し大学教員となったのは親族のなかで彼女が初めてだった。知識人としてのキャリア選択を後押ししてくれる人は誰もおらず、このことが、のちにフェミニスト研究者として自己形成していくうえで大きなハードルになったという。一方、幼少期の記憶のなかで、ただひとりロールモデルになりうる人物として、大叔母の存在があった。結婚せずに単身で暮らし、高校の教員・校長でもあった大叔母は、背丈が約6フィートと高身長だったこともあり、ひときわ周囲の尊敬を集める存在だった。のちになってモハンティは、この大叔母が実はトランスジェンダーであったことを知るが、この事実は親族のあいだで堅く秘密にされていたのだという。家族・親戚の女性たちは、みな賢くたくましく生きる人びとばかりだった。特に母親は、祖父が亡くなった後も、おじ (モハンティの母親の弟もしくは兄と思われる) を大学に通わせるため、みずからも夜間学校に通いながら日中は忙しく働く生活を送っていた。こうしたタフな女性たちの日常に触れて育ったことが、研究者としての現在の生活の励みになっているという⁽²⁾。

インドの独立後世代の一員であるモハンティにとって、植民地支配の遺産や民族解放の闘争に意識が向かうのはごく自然なことだった。高校の歴史科目は、ローカルな地域史に加えて英国統治時代の歴史を重点的に教えた。独立後インドの熱気のなかで、脱植民地化 (decolonization) を重大な理論的課題として引き受け、反乱的 (insurgent) な知を希求することは、一種の世代的使命だった。インドで学生として、ナイジェリアで高校教員として、合州国で大学院生として過ごした70年代を通じてモハンティは、F. ファノン、A. メンミ、A. カブラル、A. セゼール、L. ルクセンブルク、K. マルクス、F. エンゲルス、H. マルクレーゼ、L. アルチュセール、E. サイドといった思想家の文章に親しみ、脱植民地化の理論と実践に対する理解を深めていく。加えて、インディラ=ガンディーの強権政治に抗議する学生運動や反資本主義的左翼運動への参加を通じて、インドの国家権力と階級・カースト・宗教原理主義の結びつきを学んでいく。こうして培われた植民地主義への批判意識はやがて、権力というものがいかに作用するか、とりわけそれが何を隠蔽／可視化し、何を自然化・規範化するかを理解する基礎になったという。モハンティにとって脱植民地化とは、単に統治権を宗主国からローカル・エリートに返還する形式的処理ではなく、自己・共同体・統治構造のあらゆる次元を変革する反乱の過程であり、現地住民の闘争の歴史に根ざした集会的な過程を意味する。こうした強い信念が養われたのも、この時期のことだった⁽³⁾。

1998年のエッセイでモハンティは、70年代後半から80年代初めにかけて留学先の合州国でフェミニズムに出会った頃の経験を回顧している (Mohanty [1998]2003=2012)。彼女にとって、フェミニストとしてのアイデンティティ形成は、女性抑圧の経験のみならず、選別的な国籍法や移民帰化法の下で「外国人留学生 foreign student」のラベルを付与される経験とも強く結びついていた。大学の教室空間では、物静かなアジア人女性というステレオタイプにもとづいてしばしば無視をされた。また、旧植民地インドでクイーンズ・イングリッシュに囲まれて生活してきたにもかかわらず、教員たちはしきりに英語が理解できるかと尋ねてきた。学生たちからは、「頭が良いんだね」と褒めそやされたり、英語のアクセントがアメリカ式でないのを羨望されたりしたという。自身に向けられた軽蔑的／好意的な差別行為の数々を、やがてモハンティは、合州国の社会的・政治的構造に組み込まれたレイシズムとセクシズムの発露として理解していく。それは、「外国人留学生」という外的ラベルを相対化し、「有色人学生 student of color」や「ウィメン・オブ・カラー」という対抗的な自己定義を引き受けていく過程でもあった。

当時の大学キャンパスでは、フェミニズムの波が席卷していた。しかし、モハンティは、マスメディアや

白人中心の女性学が規定する主流のフェミニズムには魅力を感じなかった。彼女を惹きつけたのは、ジェンダー・人種・階級の結びつきを植民地主義の歴史的文脈に位置づけて理論化するウィメン・オブ・カラーのフェミニズムであり、具体的には、オードリー・ロード、ナワール・エル・サーダーウィー、アンジェラ・デイヴィス、チェリー・モラガ、ベル・フックス、ポーラ・ガン・アレン、マール・ウーといった女性たちの文章だった（Mohanty [1998]2003=2012）。2015年12月12日の講演では、この時期に獲得した理論的視点と対抗的アイデンティティを次のように表現している。

1977年にイリノイにやって来たとき初めて、私は本当の意味で、人種・肌の色（color）・階級・国民の相互に織り合わされた政治を、とりわけジェンダーやセクシュアリティに関連づけて理解するようになりました。このとき私は、グローバル・サウスにルーツをもつ「第三世界移民ウィメン・オブ・カラー third world immigrant women of color」になったのです。私にとっては、これらすべてのカテゴリーがとてつもなく重要な意味をもつものです⁽⁴⁾。

同じころ、バーバラ・スミス、パプサ・モリーナ、ジャッキー・アレクサンダー、グロリア・ジョセフ、ミツエ・ヤマダ、ケショ・スコットといった人びとも親交を深め、「第三世界」フェミニズムや反資本主義トランスナショナル・フェミニズムに連なる理論的・政治的実践の集積的基礎を形成していく。モハンティは、この時期に培われたウィメン・オブ・カラー・フェミニストたちの交流を「ホーム」という概念で形容する。彼女にとって「ホーム」とは、一般に連想されるような、快適で安定した、労せずして得ることのできる（inherited）慣れ親しんだ空間ではない。それは、社会的不正義の分析とラディカルな変革のビジョンをもとに想像される政治的かつ戦略的な空間である（Mohanty [1998] 2003:128=2012:189）。モハンティは、ウィメン・オブ・カラーの共同体への帰属意識を得ることではじめて、人種化・ジェンダー化された植民地主義の歴史に規定された自身の経験を分析する言語を獲得していったのである。

2. 国際会議 *Common Differences* の開催と論文 *Under Western Eyes* の執筆：1980年代

80年代に入り、女性学・ジェンダー研究の世界に参入する契機になった決定的出来事として本人がたびたび言及しているのが、1983年の国際会議“Common Differences: Third World Women and Feminist Perspectives”（以下、83年会議と表記）である。当時イリノイ大学の院生だったモハンティは同会議の主催者となり、4月9日から13日の5日間にわたって150人以上のスタッフを率いて実行委員会を組織した。大学院生を中心に約150人のスピーカーと約2,000人のオーディエンスを呼び込んだ同会議は、当時としては例外的な規模の集会で、合州国のウィメン・オブ・カラーと非西洋第三世界諸国出身の女性たちが国境をこえて一堂に会したという点でも画期的であった。

参加した女性たちは、いずれも世界各地で植民地主義・レイシズム・セクシズム・ホモフォビアといった課題に取り組む研究者／アクティヴィストであった。人種・階級・セクシュアリティ・国籍の境界をこえて帝国主義に抗する実践をいかに創出できるのか、ジェンダー正義を実現するうえで階級や貧困はどのような位置を占めるのか、脱植民地主義的なフェミニズムの理論的貢献とはいかなるものか、等々、フェミニズムを再定義する挑戦的な報告が多数なされたという⁽⁵⁾。だがそれは、人びとが自然に合意に達するような予定調和的な場では決してなかった。2015年12月12日の講演映像には、当時の雰囲気伝える貴重なやりとりが記録されている。フロアから「Common Differencesという概念は内部に対立が存在する可能性を念頭に置

いていたのか」と問われたモハンティは、「私たちはとても大きな対立（huge conflicts）を抱えていました」と応じたうえで、「まだ80年代前半だったこともあるのですが、経済的収奪のほうがセクシズムからの解放よりも重要だと主張するような人もたしかに存在したのです」と述べ、呆れた表情で頭を抱える仕草をみせている⁽⁶⁾。この発言から、個々の闘争を切り分けて優先順位を設ける思考がウィメン・オブ・カラーのあいだにも存在していたことが分かる。しかしそれでも当時は、白人女性の視点がフェミニズムの主流とされるなか、レイシズムや植民地主義との闘争を打ち出すスローガンの下に結集すること、そしてそこから創発的に新たな協働が生じる可能性に賭けることに大きな意味があったのである。

83年会議に参加した女性たちは、白人男性中心主義的なアカデミーから排除される経験を多かれ少なかれ共有していた。モハンティは、運動の現場で重要な役割を果たしているウィメン・オブ・カラーの学生が、学位取得に至らずドロップアウトするケースを何度も目にしてきたという。また、ウィメン・オブ・カラーのフェミニストは、教員の職を得ても数年の有期契約であることがほとんどであり、競争的環境のなかで断絶を強いられる。このような状況は女性学関連講座のポストにもあてはまる。希少なポストをめぐるマイノリティ研究者が互いに競合させられ、短期間に次々と入れ替わる大学人事制度を、モハンティは「回転ドアrevolving door」という表現で痛烈に批判している⁽⁷⁾。当時モハンティを指導していた教員たちは、開催費用を院生が調達できるはずがないといった理屈を並べて83年会議の実施に難色を示したという⁽⁸⁾。こうした反応は、逆説的にも、同会議の意義をモハンティに確信させた。ウィメン・オブ・カラーが結集すれば、アカデミーに浸透した権力関係がおのずと明るみになることとなり、だからこそ権威主義の体制に馴致された教員たちは同会議を危険視したのである。83年会議は、レイシズムと植民地主義に対抗するフェミニスト共同体を広く可視化することに成功したのであり、これ以後モハンティは、反レイシズム・反植民地主義の立場からフェミニズムにいつそう深くコミットしていく。

なお、院生時代に書かれた業績としては、ブラック・フェミニズムの古典*All the Women are White, All the Blacks are Men, But Some of Us are Brave*（G. T. Hull, P. B. Scott & B. Smith編, Feminist Press, 1982年）に寄せた書評がある（Mohanty 1983）。そこでモハンティは、同書が、黒人研究と女性学の双方から消去されてきた黒人女性に固有の経験を描き出し、ブラック・フェミニズムに根ざした研究の道筋を打ち出している点を高く評価している。短いエッセイではあるが、この時期すでに、ウィメン・オブ・カラーの経験を客体化する学問的言説の作用に強い関心をもっていたことが窺われ、86年論文の萌芽をみてとれる。また、コースシラバスや必読書リストなど大学教育に応用できる実践的内容を盛り込んでいる点に同書の利点をみしており、大学を拠点とした批判的教育実践にも早くから関心を寄せていたことが分かる。

86年論文執筆当時のモハンティは、いわゆるABD（all-but-dissertation、必要単位の修得を終えた博士論文提出直前の院生）の立場であり、非常勤講師としてコーネル大学で女性学科目を担当していた。83年会議以来、アカデミーの内外でネットワークを発展させてきたモハンティだが、白人中心のエリート大学で教鞭をとるなかでウィメン・オブ・カラーの周縁性をさらに強く自覚するようになる。2016年のインタビューでモハンティは、移民女性に声を発する場を与えない白人フェミニズム理論と女性学プログラムの状況を、憤りとともに振り返っている⁽⁹⁾。そもそも「第三世界」女性は「開発と政治経済」や「開発のなかの女性」といった一部のコースにしか登場せず、その扱われ方も「私たち」と「彼女たち」を強固に分離するパラダイムにもとづいていた。「第三世界」女性は、開発政策のターゲットとみられるか、もしくは「多様なフェミニズム」を彩る添え物として利用されていた。86年論文の企図は、こうしたフェミニズム理論の普遍主義的・植民地主義的傾向を批判し、「第三世界」女性が置かれた物質的現実と具体的文脈に基礎をおくフェミニスト研究を目指して方法論的介入を試みることにあった（Mohanty 2013）。

刊行までの道のりは決して平坦ではなかった。論文の構想をフェミニストの会合で発表するたびに白人研究者から不信のまなざしを向けられ、アウトサイダーとしての立ち位置を突きつけられた。幼児教育の研究に専念して、フェミニズム理論には手を出すべきでないと忠告されることもあった。また驚くべきことに、年配の白人フェミニストのなかには、植民地主義の概念を、冷戦体制下における合州国の帝国主義戦略や開発政策ではなく、英国統治時代の北アメリカ植民地を指していると理解する人もいた。フェミニズムの脱植民地化という問題設定は、エスタブリッシュメントと化した白人フェミニズム理論の支持者には意味不明な攻撃的言論と受け止められたのである⁽¹⁰⁾。軽蔑と無知にもとづく否定的な受け止めは、不安定な条件で雇用されていたモハンティに小さくないショックを与えたと思われる。

モハンティは当初、86年論文の草稿を、合州国の代表的なフェミニスト・ジャーナルである*Signs*誌に投稿したが、結果は不採択であった。「なぜこんな文章のために時間を空費させるのか。何の価値もない」といった侮辱的なコメントが付されていたという (Mohanty 2013)。論文を最初に掲載したのは、合州国の左翼系文学雑誌*Boundary 2* 誌だった。すぐさまイギリスの*Feminist Review*誌に転載され、ドイツやオランダのフェミニスト・ジャーナルにも翻訳が掲載された。おそらく多くの研究者は、1988年刊行の*Feminist Review*版、あるいは1991年の論集*Third World Women and the Politics of Feminism* (Mohanty, Russo, & Torres編) 所収のバージョンを介して86年論文に接したものと思われる。合州国のフェミニスト・アカデミーから一度拒絶され、ヨーロッパを経由したのちに逆輸入されてきたという複雑な来歴自体が、この論文の政治的意義を物語っている (Mohanty 2013)。周知のとおり現在では、20以上の言語に翻訳され、人文社会科学のあらゆる分野で必読文献とみなされている。

モハンティに86年論文を書かせた原動力は、一言でいえば、「第三世界」女性の経験を抹消する白人フェミニズムへの怒りであった。だがそれは、ウィメン・オブ・カラーの共同体への深い信頼がなければ実を結ばなかっただろう⁽¹¹⁾。白人フェミニストによる軽蔑的処遇の一方で、彼女を温かい承認で迎えたのは人種的マイノリティや旧植民地出身の移民女性たちだった。この経験からモハンティは、フェミニズムの内部に制度化されたレイシズムと植民地主義の権力を理解するとともに、反レイシズム・反植民地主義の立場からフェミニズム理論を刷新する決心を固めていく。米山リサ (2003) が指摘するように、モハンティの「第三世界」フェミニズムは、地政学的実体としてのいわゆる非西洋第三世界諸国のみを想定するものではなく、近代資本主義がもたらした移民女性の複雑な経験と結びついている。こうした背景の下で、合州国の人種的マイノリティ女性と非西洋第三世界諸国女性のあいだにトランスナショナルな連帯を創出する積極的自己定義の理論として「第三世界」フェミニズムは生まれたのである。

3. 資本主義と軍事主義への抵抗：1990年代以降

86年論文をきっかけに世界的に名を知られるようになって以降も、モハンティは研究者／アクティヴィストとして、グローバル資本主義や軍事主義的暴力に対抗する活動に力を注いできた。ここでは、それらの実践を大きく3つに分けて紹介したい。

第1は、インドのオリッサ州と合州国のノースカロライナ州で活動する2つの草の根組織との連携である。オリッサの団体は、多国籍企業による土地・生活・文化の収奪とそれを野放しにするインド政府の姿勢に抗議するため、小作労働者の組織化に取り組んでいる。この活動の背景には、オリッサの民衆による粘り強い抵抗の歴史がある。ノースカロライナの団体は公民権運動の時期に設立され、非西洋第三世界諸国の貧困労働者階級に社会運動のために必要な物資を提供したり、監獄の民営化に反対したりする活動を行っている。

これらの組織はいずれも「フェミニスト団体」を名のることはないものの、ジェンダー視点に貫かれた共通の社会正義のビジョンをもっているという⁽¹²⁾。

モハンティは、両団体の交流を促進するため、互いの活動拠点を訪問しあうスタディツアーを企画する。そこでは、グローバル資本主義が旧植民地・旧宗主国の双方で人種的マイノリティを貧困化させていることが共通認識として確認された。しかし、「アメリカ人であることAmericanness」、すなわち合州国の人びとが有するナショナリティの意味については、団体間で認識の齟齬がみられたという。ノースカロライナの人びとは、黒人労働者が貧困に追いやられる過程を合州国のナショナリティと結びつけて考えることが少ない。これに対し、オリッサの人びとは、農民の貧困をインドの国民形成や西欧諸国との国際関係と不可分のものと捉え、合州国の不平等や搾取の歴史に対しても鋭い批判を向けた。モハンティは、こうした認識上の差異こそ、トランスナショナルな連帯を築く出発点になると捉えている。連帯とは、共通の目標を掲げることで一足飛びに差異を解消してしまうことではない。「差異について学ぶこと、そして内なる権力について学ぶことは、闘争の戦略やアジェンダを立てることと同じくらい重要なのです」⁽¹³⁾。このように、モハンティ自身、86年論文を通じて打ち出した「第三世界」フェミニズムの構想を、具体的な運動の場に参入するなかで模索し続けてきたのである。

第2は、合州国の帝国主義的侵略戦争への抗議である。周知のように、9.11以後の「対テロ戦争」を名目としたアフガニスタンやイラクへの軍事侵略においては、宗教原理主義と家父長制に抑圧された現地の女性を「救援」という大義名分が動員され、有力なフェミニスト団体がこれに賛同してプッシュ政権への支持を表明した。合州国内では、ヴェールを着用したムスリム女性の写真が大量に流通するとともに、ムスリムやアラブ系移民の監視・収容が進行し、ストリートでの暴力も激化した。まさにモハンティが80年代以来告発してきた「第三世界」女性の植民地主義的表象が、帝国主義的・軍事主義的暴力を正当化するシンボルとして浮上したのである。

2001年のインタビューでモハンティは、合州国の対外政策を強く非難している。タリバーンの政権掌握は西欧諸国による強圧的干渉政策の歴史と関連しており、宗教原理主義下の女性抑圧をそこから切り離して本質化することは、侵略に抗議する現地の女性団体の声をかき消すだけでなく、北米社会にも根づいた家父長制とミソジニーを棚上げすることになると主張している⁽¹⁴⁾。2006年の論文では、このような視点から高等教育の女性学プログラムにも批判的介入を行う。そこでは、女性学の「国際化internationalization」が謳われた90年代以降もフェミニズム理論は白人中心主義を克服できておらず、そのことが主流フェミニズムによる侵略戦争への加担に道をひらいたとしている。これに対抗するためにも、特権的な白人フェミニストによる「救援」の物語にヘゲモニーを譲り渡すことなく、反レイシズム・反帝国主義を基礎にしたフェミニズムの連帯をアカデミーの内外に張り巡らしていくことを説く (Mohanty 2006)。2008年には、R. RileyとM. B. Prattとの共編で論集*Feminism and War: Confronting US Imperialism*を出版する。ウィメン・オブ・カラーの視点から侵略戦争を多角的に分析したこの書籍は、2006年10月にシラキュース大学で開催されたシンポジウムを下敷きにしている。このシンポジウムには、右翼団体が会場外で妨害行動をとるなか、1,000人以上が詰めかけた。さらに2011年には、先住民女性を含む11人のウィメン・オブ・カラーから成るグループの一員としてイスラエル占領下のパレスチナを訪問し、10日間にわたって現地住民の生活に接した。帰国直後、「パレスチナに正義を」と題するステートメントを連名で発表し、イスラエルの軍事行動とそれを後押しする合州国の開発援助を即時停止するよう呼びかけている。

第3は、高等教育カリキュラムの批判的分析とそれにもとづく批判的教育実践の構想である。2003年の論文では、大学と新自由主義イデオロギーの癒着を批判したうえで、反資本主義トランスナショナル・フェミ

ニズムの視点を軸に女性学プログラムを組み立てる必要性を提起している (Mohanty [2003]2003=2012)。それを発展させるかたちで2010年に発表されたJ. アレクサンダーとの共著論文では、北米の大学における女性学・ジェンダー研究・クィア研究のシラバスの分析を通じて、反資本主義トランスナショナル・フェミニズムの理論がどのような枠組みで学生に教えられているのかを読み解いている。それによると、70～80年代と比較すればウィメン・オブ・カラーの作品や著作に触れる科目が増え、「フェミニズムの多様性」を強調する傾向が強まってはいるものの、その大部分は各地のローカルな女性運動や代表的なフェミニストの思想を羅列的に紹介するにとどまり、個々の闘争を繋ぐ文脈が遮断されている。いわば「加えて混ぜるadd & stir」式の表面的な多様性礼賛に陥っており、帝国主義や軍事主義との闘争をフェミニズムの問題として掲げる授業は例外的だという (Alexander & Mohanty 2010)。

他方でモハンティは2015年から、黒人フェミニストでシラキユース大学の同僚でもあるL. カーティとともに挑戦的なプロジェクトを展開している。それは、反レイシズム・反資本主義の立場からフェミニズムを発展させてきたウィメン・オブ・カラーおよび一部の白人女性のライフストーリーを聴き取り、映像アーカイブに記録するというもので、現在 (2023年11月) までに、A. デイヴィス、B. スミス、Z. アイゼンステイン、C. モラガなど、50人をこえる女性たちの聴き取り映像が公開されている⁽¹⁵⁾。2018年にはこれらの語りをまとめた書籍も刊行された (Mohanty & Carty eds. 2018)。

4. まとめ

以上みてきたように、研究者／アクティヴィストとしてのモハンティの軌跡は、「第三世界」フェミニズムならびに反資本主義トランスナショナル・フェミニズムの連帯に向けて変革的な知を創出していく過程であった。それは、単にひとりのフェミニスト知識人の思想形成過程であるのみならず、合州国のアカデミーに制度化された白人中心主義・男性中心主義を揺さぶる抵抗の軌跡であり、ウィメン・オブ・カラーの共同性に根ざした闘争のドキュメントでもある。

最後に強調しておきたいのは、モハンティが、自らの地位がアカデミーの中核へ近づくにつれて自分自身の特権に対する意識化を迫られていったということだ。2001年のインタビューでモハンティは、次のように語る。「アカデミーに身を置くことで獲得される特権とはつまり、何かを見ないで済む特権ということです。アカデミーの内側に身を置くわたしたちには、このような特権が見えなくなってしまうのです」⁽¹⁶⁾。また、2003年の論文では、大学の常勤教員となった自らの立ち位置について、「西欧のまなざしの下 (under)」というよりも「西欧のまなざしの内側 (inside)」にいたると言ったほうが正確かもしれないと述べ、86年論文執筆当時の立場と慎重に差異化している (Mohanty [2003] 2003:221=2012:323)。このように、大学の権威主義のみならず自らの特権性をも解体しようとする姿勢こそ、レイシズム・セクシズム・資本主義の廃絶を願うすべての人びとに確かな道標を示すものではないか。日本のフェミニスト研究がこれまで以上に広くアジアや「第三世界」との連帯にひらかれていくためにも、つねにアカデミーとアクティヴィズムの境界を往還するモハンティの姿勢は重要な示唆を与えてくれるはずである。今後は、以上の個人史を念頭に置きつつ、より理論内在的にモハンティの思考に迫ることを課題としたい。

注

- (1) 鄭暎恵 (2003) は、A. デイヴィスにならって、ウィメン・オブ・カラーという言葉や、「生物学上の概念でも人種的アイデンティティでもなく、ある政治的課題を共有する女たちのコミュニティを指すポリティカ

ル・アイデンティティ」(鄭 2003:64)と定義したうえで、これを「有色女性」と日本語訳してしまうと本来の意味が表現されないとしてカタカナ表記を用いている。本稿でもこの表記を引き継ぐ。

- (2) L. Alcoffとのインタビュー (2013)。
- (3) 2015年12月12日の講演 (Cornelia Goethe Center for Women's and Gender Studies 2022b)。
- (4) 2015年12月12日の講演 (Cornelia Goethe Center for Women's and Gender Studies 2022b)。
- (5) L. Alcoffとのインタビュー (2013)。
- (6) 2015年12月12日の講演 (Cornelia Goethe Center for Women's and Gender Studies 2022b)。
- (7) Dua & Trotzとのインタビュー (Dua & Trotz 2002)。
- (8) *Journal of Narrative Politics*編集委員会とのインタビュー (Journal of Narrative Politics 2016)。
- (9) L. Alcoffとのインタビュー (2013)。
- (10) L. Alcoffとのインタビュー (2013)。
- (11) ウィメン・オブ・カラーの存在を消去する白人中心主義的フェミニズムへの抗議の姿勢は、近年になっても一貫している。2015年12月12日の講演映像には、この点に関する興味深いやりとりが記録されている。そこでポイントになったのは、モハンティが政治哲学者ナンシー・フレイザーの議論をどうみているかということだった。モハンティがグローバル資本主義に対抗するフェミニズムの連帯を呼びかける一方、フレイザーは「再配分の政治」ではなく「承認の政治」に偏重するフェミニズムの現状に警鐘を鳴らしており、両者の立場は重なる部分が多いようにもみえる。だが、司会者からの質疑で「フレイザーは、非唯物論的な闘争が新自由主義と合流してしまい、承認の政治によって唯物論的な闘争が周縁化されていることに失望したと書いていますが、フレイザーの立場はあなたと近いですか、それとも違いがありますか」と問われたモハンティは、即座に語気を強めて「全く違います。フレイザーには全然同意しません」と断言し、その理由を2点に分けて説明している。ひとつは、反レイシズムの解放闘争、セクシズムからの解放闘争、トランスジェンダーの解放闘争などあらゆる形態のアイデンティティ闘争を、一般化された単一のアイデンティティ・ポリティクスに回収していること。もうひとつ、より重要な点は、合州国のフェミニズム史をきわめて単純に切りとって叙述していることである。ここでモハンティの批判は特に、社会主義やマルクス主義にコミットするウィメン・オブ・カラーや黒人女性の存在が消去されていることに向けられている。「私たち [=ウィメン・オブ・カラーや黒人女性——引用者註] はこの世に存在しておらず、そんな仕事 [=社会主義やマルクス主義の思想と行動、つまりフレイザーのいう唯物論的な闘争を指す——引用者註] をしてこなかった、白人女性こそがそのような仕事をしてきたのだと言っているかのようです」。この発言から、モハンティのグローバル資本主義批判が、白人中心主義的フェミニズムに対するウィメン・オブ・カラーの異議申し立ての系譜に連なるものであることを再確認できる。2人の論者の理論的共鳴を探る試みが無効になるわけではないとしても、白人女性とウィメン・オブ・カラーの位置を分節化しない歴史叙述にモハンティが異を唱えていることは改めて強く銘記されるべきだろう。
- (12) Dua & Trotzとのインタビュー (Dua & Trotz 2002)。
- (13) Dua & Trotzとのインタビュー (Dua & Trotz 2002:73)。
- (14) Dua & Trotzとのインタビュー (Dua & Trotz 2002)。
- (15) <http://feministfreedomwarriors.org/index.php#> 2023年11月15日取得。
- (16) Dua & Trotzとのインタビュー (Dua & Trotz 2002:74)。

引用文献

- 伊藤るり 2011「自分の痛覚をもって、世界と繋がるフェミニズム」天野正子ほか編『新編 日本のフェミニズム 9: グローバリゼーション』岩波書店, 1-42頁。
- 岡真理 1998『「同じ女」であるとは何を意味するのか: フェミニズムの脱構築に向けて』江原由美子編『性・暴力・ネーション: フェミニズムの主張 4』勁草書房, 207-256頁。
- 鄭暎恵 2003『〈民が代〉 斉唱: アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』岩波書店。
- 堀田碧 2001『「第三世界」女性表象をめぐる一考察: グローバリゼーションとフェミニズムの可能性』伊豫谷登士翁編『経済のグローバリゼーションとジェンダー』明石書店, 213-243頁。
- 水溜真由美 2012「アジアの女たちの会とその周辺: 国際連帯の視点から」安田常雄編『社会を問う人びと: 運動のなかの個と共同性』岩波書店, 258-285頁。
- 嶺崎寛子 2018「訳者あとがき」L. アプー＝ルゴド著『ムスリム女性に救援は必要か』書肆心水。

米山リサ 2003 「批判的フェミニズムの系譜と女性国際戦犯法廷」『暴力・戦争・リドレス：多文化主義のポリティクス』岩波書店, 111-157頁.

モハンティ主要著作リスト

<論文> (共著含む) ★: 単著 *Feminism without Borders* (2003) に再録された論文

- Mohanty, C. T. 1983 "On Salvaging Difference: The Politics of Black Women's Studies." Women's Studies International Forum, Vol.6, No.2, pp.243-247.
- ★ Mohanty, C. T. 1984 "Under Western Eyes: Feminist Scholarship and Colonial Discourses." Boundary 2, Vol.12, No.3/Vol.13, No.1, pp.333-358.
- ★ Martin, B., & Mohanty, C. T. 1986 "Feminist Politics: What's Home Got to Do with It?" T. de Lauretis ed. Feminist Studies/Critical Studies, Indiana University Press, pp.191-212.
- ★ Mohanty, C. T. 1987 "Feminist Encounters: Locating the Politics of Difference." Copyright, Vol.1, pp.30-44.
- ★ Mohanty, C. T. 1989/1990 "On Race and Voice: Challenges for Liberal Education in the 1990s." Cultural Critique, Vol.14, pp.179-208.
- ★ Mohanty, C. T. 1991 "Cartographies of Struggle: Third World Women and the Politics of Feminism." C. T. Mohanty, A. Russo, L. Torres eds. Third World Women and the Politics of Feminism, Indiana University Press, pp.1-47.
- ★ Mohanty, C. T. 1997 "Women Workers and Capitalist Scripts: Ideologies of Domination, Common Interests, and the Politics of Solidarity." M. J. Alexander, & C. T. Mohanty eds. Feminist Genealogies, Colonial Legacies, Democratic Futures, Routledge, pp.3-29.
- ★ Mohanty, C. T. 1998 "Crafting Feminist Genealogies: On the Geography and Politics of Home, Nation, and Community." E. Shohat ed. Talking Visions: Multicultural Feminism in a Transnational Age, MIT Press, pp.485-500.
- ★ Mohanty, C. T. 2003 "'Under Western Eyes' Revisited: Feminist Solidarity through Anticapitalist Struggles." Signs: Journal of Women in Culture and Society, Vol.28, No.2, pp.499-535.
- Mohanty, C. T. 2006 "US Empire and the Project of Women's Studies: Stories of Citizenship, Complicity and Dissent." Gender, Place & Culture, Vol.13, No.1, pp.7-20.
- Alexander, M. J., & Mohanty, C. T. 2010 "Cartographies of Knowledge and Power: Transnational Feminism as Radical Praxis." A. L. Swarr & R. Nagar eds. Critical Transnational Feminist Praxis, State University of New York Press, pp.23-45.
- Mohanty, C. T. 2010 "Social Justice and the Politics of Identity." M. Wetherell & C. T. Mohanty eds. The SAGE Handbook of Identities, SAGE, pp.529-539.
- Mohanty, C. T. 2013 "Transnational Feminist Crossings: On Neoliberalism and Radical Critique." Signs: Journal of Women in Culture and Society, Vol.38, No.4, pp.967-991.
- Carty, L. E. & C. T. Mohanty, 2015 "Mapping Transnational Feminist Engagements: Neoliberalism and the Politics of Solidarity." R. Baksh & W. Harcourt eds. The Oxford Handbook of Transnational Feminist Movements, Oxford University Press, pp.82-115.

<書籍> (単著・編著)

- Mohanty, C. T., A. Russo, L. Torres, eds. 1991 Third World Women and the Politics of Feminism, Indiana University Press.
- Alexander, M. J., & Mohanty, C. T. eds. 1997 Feminist Genealogies, Colonial Legacies, Democratic Futures, Routledge.
- Mohanty, C. T. 2003. Feminism without Borders: Decolonizing Theory, Practicing Solidarity, Duke University Press. (= 堀田碧監訳『境界なきフェミニズム』法政大学出版局, 2012)
- Riley, R. L., C. T. Mohanty & M. B. Pratt, eds. 2008 Feminism and War: Confronting US Imperialism, Zed Books.
- Wetherell, M. & C. T. Mohanty, eds. 2010 The SAGE Handbook of Identities, SAGE.
- Mohanty, C. T. & L. E. Carty eds. 2018 Feminist Freedom Warriors, Haymarket Books.

<インタビュー>

- Dua, E., & Trotz, A. 2002 "Transnational Pedagogy: Doing Political Work in Women's Studies-An Interview with Chandra Talpade Mohanty." Atlantis: Critical Studies in Gender, Culture & Social Justice, Vol.26, No.2, pp.66-77.
- Rajkumar, D. et al. 2010 "Interview with Chandra Talpade Mohanty: On the Academy and Feminist Politics." Feminist Approaches in Culture and Politics, Vol.12, pp.1-7.
- Alcoff, L. 2013 "Feminists We Love: Chandra Talpade Mohanty." The Feminist Wire. [<https://thefeministwire.com/2013/10/feminists-we-love-chandra-mohanty/>] (2023年11月15日取得)
- Journal of Narrative Politics. 2016 "Editors' Interview with Chandra Talpade Mohanty." Journal of Narrative Politics, Vol.2, No.2, pp.86-90.

<講演映像>

- Cornelia Goethe Center for Women's and Gender Studies 2022a. "Chandra Mohanty "Neoliberal Projects, Insurgent Knowledges, and Pedagogies of Dissent."" [<https://www.youtube.com/watch?v=PhyCLtnGE2A&t=46s>] (2015年12月16日講演映像、2023年11月15日取得)
- Cornelia Goethe Center for Women's and Gender Studies 2022b. "Chandra Mohanty "Wars, Walls, Borders: Anatomies of Violence and Postcolonial Feminist Critique."" [<https://www.youtube.com/watch?v=6rBrgD07ol0>] (2015年12月12日講演映像、2023年11月15日取得)

A Personal History of Chandra Talpade Mohanty — From “Third World” Feminism to a Critique of Global Capitalism —

KONDO Rintaro

This research note aims to trace the personal history of Chandra Talpade Mohanty, an Indian-born U.S. feminist, as a preliminary work to clarify her theoretical framework of “Third World” feminism and anti-capitalist transnational feminist critique. Mohanty’s work as a feminist theorist has been well-known all over the world since her 1986 article “Under Western Eyes: Feminist Scholarship and Colonial Discourses,” and she has made her mark on feminist history as a leading critic of colonialist representations of Third World women by Western white feminism.

However, her personal background that has shaped her theoretical thought has not been adequately discussed. Also not well known are her unique activities committed to an actual political agenda, such as her collaboration with organizations supporting poor workers, her protests against the imperialist global strategy of the U. S., and her creation of a video archive documenting the life stories of women of color feminists. In this paper, I shed light on the personal experiences and institutional contexts from where the theory of Third World feminism symbolized by the 1986 paper emerged, as well as how the theory evolved into what political practice in response to the latest phase of capitalism, to provide an auxiliary line for understanding the significance of Mohanty’s theory today.